

脇山早生温州の特性について

申牟田拓史・江原忠彰

(佐賀県果樹試験場)

NAKAMUTA, T. and EHARA, T.

On the Characters of Wakiyama Wase Satsuma

佐賀県東松浦郡浜玉町草場、脇山淳氏のミカン園において、昭和10年頃植栽された宮川早生温州から枝変わりとして発見された、極早生系の脇山早生温州（仮称）について、その特性を調査したので、その結果を報告する。

(1) 樹勢は、宮川早生よりやや弱く、特に結実期になると、新梢・新葉とも小さくなる傾向がある。結果樹の葉面積は、宮川早生より11%程度小さかった。

(2) 開花時期は、宮川早生とほとんど相違がなく、着花（果）とも毎年良好で、豊産性である。

(3) 果皮色は、緑のぬけ早く9月上旬頃より始まり、宮川早生より約2週間早く着色する。

また、果肉色は、8月上旬では宮川早生が黄白色であるのに対し、脇山早生は、すでに赤味を帯び熟度が進んだ傾向を示している。

(4) 9月上～中旬における果実剥皮時の感じは、宮川早生などが堅く感じられるのに対し、脇山早生は、果皮、果肉とも弾力に富み柔かな感じである。

(5) 果型は、幼果時から果梗部が突出する傾向があり、収穫時の果実は、円味を帯びた腰高な果実、あるいは、その上にネックがある果型になり易い。

果径指数は、1.00～1.20位の間で、扁平系とはいえない。

また、玉伸びは、樹勢が落ち着いた木のふところ枝において目立って悪く、小玉が多い。

(6) 採取時における果皮は、やや厚い傾向があり、果皮歩合で20～23%位で、早生温州としては多い方である。また、果皮面の油胞が、凸になることがほとんどなく、平面か、凹になり易い。

(7) 果肉の室数は、脇山早生が9.5前後、他の系統が10.5前後で、他の早生温州より1余り少ない。

(8) 糖含量は、他の早生温州と比べた場合ほとんど大

差ないが、10月上～中旬以後になると、糖の増加が悪いようである。

(9) クエン酸について

イ. クエン酸含量は、過去6年間の現地での調査で、枝変わり果（脇山早生）が原木果（宮川早生）より、9月中～下旬で約0.8少く、9月末では、毎年1.0以下を示すようになる。

また、場内における高接比較試験においても、減酸が早いことで知られている三保早生より脇山早生が、0.4（49年10月上旬）～0.75（50年9月下旬）も少ないクエン酸含量を示した。

ロ. クエン酸含量の推移も同じく高接の三保早生と比較してみると、酸の生成増加期から脇山早生が少く、酸含量のピーク時（7月下旬頃）とも、絶対量が少く、その後、酸含量の減少時も、同様な差を維持しながら減少曲線を示した。

従って、脇山早生のクエン酸は、生成当初から全期間を通じて、酸含量が極めて少い系統である。

以上のことから、脇山早生は着色も早く、クエン酸含量が少い早熟系であるため、極早生系温州と思われる。しかし、10月になると酸含量が減少し過ぎ、糖ののりが悪く淡白な味となり易い。

そこで、採取労力の配分を考慮して、青切りミカンが出荷される前の9月上旬から中・下旬に供給できるミカンとして、また、ハウスミカンの早出し用として、興味ある系統である。

しかし、欠点である果型や玉伸びの問題もあるので、完成された系統とはいえず、当分は、優良系が出るまでのつなぎの系統と思われる、今後、この系統に適した栽培技術の改善や品種改良が必要と思われる。